

一昨年9月、恵那の有志たちが独自に「恵那人による恵那の音楽祭」を開催致しました。おかげさまで盛況を博し、好評を得ることができました。とくに、市民の皆様が積極的に参加して下さった合唱の『ハレルヤコーラス』の盛り上がりが話題になり、第2回目の音楽祭開催の期待と支持の声をいただいておりますところ、本年度の国民文化祭「清流の国ぎふ」文化祭2024における恵那市の催しとして、再び市民の合唱出演による、ベートーヴェンの『交響曲第9番』（『第九』）の全曲演奏に挑戦する運びとなりました。毎年世界の各地で演奏されているこの名曲ですが、同じような発想と形態で演奏するのではなく、ウィーンでの初演時のように市民が合唱に参加する意義を重視し、主役の合唱をオーケストラと指揮者が支えるという発想で音楽を解釈して、当時の規模と演奏スタイルに近づけることで、作曲者の革新的な思想もお伝えできるような『第九』の演奏をお楽しみください。



「おお同志たちよ、
これらの調べではなく!」

恵那人による演奏 オーケストラ：恵那祝祭管弦楽団／合唱：恵那祝祭合唱団



指揮
神田 豊壽



コンサート・マスター
高橋 律也



合唱指揮
齊藤 順子



ソプラノソロ
酒井 和音



アルトソロ
長谷川 美央



テナーソロ
市川 太一



バリトンソロ
酒井 一樹

この催しは、「恵那人による」企画、制作、運営であるだけでなく、演奏も恵那縁の方々によって行われます。「恵那祝祭合唱団」は恵那市及び近隣から応募された人たちが結成され、「恵那祝祭管弦楽団」はコンサートマスターの高橋律也さんを中心として各地より集められたプロの奏者たちで特別に編成されたオーケストラです。合唱指導の齊藤順子さんも、重唱で合唱を先導する声楽の4人独唱者たちも恵那で活躍されている方々です。

このように、地元の音楽力、優秀な人材を結集してのコンサートですので、是非ご来場、およびご支援ご声援をお願い申し上げます。

（「恵那」とは、「次米木簡」（677）に記されている古代の恵那地方の呼称であり、旧恵那郡と土岐、木曾を合わせた地域でした。）

プレコンサート・レクチャー 「第九を面白く聴くために」

14:00 開始(13:30 開場)

※コンサートチケットをお持ちの方に限ります。出入りは自由です。

音楽監督が、『第九交響曲』を面白く聴くための要点を、最新の研究と革新的な知見に基づいて、実際のオーケストラの演奏でわかりやすく、具体的に解説します。これを聞けば、合唱の前に置かれている3つの楽章の意味が理解でき、ベートーヴェンが合唱と重唱を交響曲に入れた理由と意義がわかるので、引き続き演奏される全曲をより興味深く聴くことができます。このような企画は、他には例がない画期的なものです。

佐藤一斎とベートーヴェン

「元聲太和の天地人心に存する音楽」と「歓喜の合唱」

今年が『言志録』が上梓されて200年目に当たります。『第九交響曲』が初演されたのも奇しくもこの年の1824年です。この歴史的な2つの偉業が世に問われた200周年に、恵那の地で『交響曲第9番』を初演を意識して演奏されることは大変感慨深いことです。一斎もベートーヴェンも、封建体制が崩壊して近代の国民国家が成立する大変革の前夜の時代に生きました。そして、このような歴史の転換期でしか生み出されなかった作品、そのような時代であったからこそ培われた思想は、今なお多くの人々に精神的な指針と糧をもたらしているという点で、両者の人類への貢献は共通するところがあります。

一斎先生は「礼楽」の『楽』として重視する音楽の理想について、『言志録』第77条で「元聲太和の天地人心に存するもの」、つまり、「国や時代を超越して天に通じるもの、人々の精神の向上と幸福につながる不滅の音楽である」とその普遍性を説かれています。このような音楽が古今東西にあるとしたら、この『第九交響曲』以上のものは思い当たりません。



顧問アドバイザー 高橋 賢亮

元恵那高校音楽専科教師、多治見北高校を経て中部学院大学教授を務める。テナー歌手、合唱指導者として現役活躍中の音楽界の重鎮。土岐市在住。

音楽監督、演出 古山 和男

恵那市出身。古楽の演奏研究を専門にする。ベートーヴェン、夏目漱石、佐藤一斎についての著作、著述、講演も活発に行なっている。「第1回恵那人による恵那の音楽祭」を実行委員長として企画制作した。